

字なるをしらず、暴も坊もその假名ばう也、ぼうと書はたがへり、亦世俗、小賊を畫鳶ヒルトビといふ、唐山に夜鷲といふ怪鳥あり、このものに對すべし、五雜俎云、蒞支果將熟、專有飛盜、綠枝接樹、趨捷如風、園丁防之、若巨寇、然瞬息不覺、千万樹皆被漁獵、名曰夜鷲云々、

〔松屋筆記 三十七〕白波綠林

後漢書劉玄傳に、新市人王匡王鳳爲平理諍訟、遂推爲渠帥、衆數百人、於是諸亡命馬武、王常、成丹等、往從之、共攻離鄉、聚藏於綠林中、數月間至七八千人云々、注に、綠林山在今荊州當陽縣東北也云々、同書王常傳に、與王鳳王匡等起兵雲杜綠林中、聚衆數萬人云々、強盜を綠林といふは、この故事によれる也、同書靈帝紀に、中平元年、張角反、皇甫嵩討之、角餘賊在、西河白波谷爲盜、時俗號白波賊云云、また中平四年云々、黃巾餘賊敦大等、起於西河白波谷、寇太原河東云々、同書獻帝紀に、冬十月云云、白波賊寇河東、注に、薛瑩書曰、黃巾郭泰等、起於西河白波谷、時謂之白波賊云々、同書趙典傳に、典兄子謙云々、轉爲前將軍、遣擊白波賊、有功、封鄆侯云々、同書董卓傳に、初靈帝末、黃巾餘黨郭太等復起、西河白波谷、轉寇太原、遂破河東、百姓流轉、三輔號爲白波賊、衆十餘萬云々、同書南匈奴傳に、單于將數千騎、與白波賊合兵、寇河內諸郡云々、賊をえら浪といふは、この故事也といふ、古今伊物の、おきつしら浪たつた山とよめるも、必盜の事をよせつと見ゆ、海道記にも、白波綠林の事あり、さてえら浪といふは、もと逆浪など、叛逆の者をいふより出たる詞にや、たつといへる縁語も、山だちなどによしあり、尙可考、

〔瑤囊抄〕賊ヲ梁上公ト云何事ゾ、陳仲弓ガ家ニ入シ盜人ヲ云初ケル也、○下略

〔松屋筆記 八〕屋上盜飛賊、三バウ、

今より十年ばかりのむかしにやありけん、日本橋に家根盜とて、人家の屋上を飛行て盜をなすものありき、五雜俎五の卷十一に、萬曆間、金陵有飛賊、出入王侯家、如履平地と見ゆ、又をと、し天